

まえがき

本書は平成12年度アジア経済研究所開発研究部研究会「金融・経済再生への挑戦／東アジアの経験と課題」の1年間の研究成果をとりまとめたものである。また、本書は『アジア通貨危機—その原因と対応の問題点—』（研究双書No.501, 国宗浩三編, 2000年1月発行), 『金融と企業の再構築—アジアの経験—』（研究双書No.510, 国宗浩三編, 2000年12月発行), の2冊のアジア金融に関連する書の流れを引き継ぐものである。

先行する2冊は, それぞれ, アジア通貨危機の原因などに関する分析と, アジア通貨危機後の金融・経済の建て直し策に関する分析という時宜に合ったテーマを扱った。それに対し, 本書では, より中長期的な視野から「強固な」金融システムを構築していくためには何が問題であり, 何が必要とされているかという観点からの分析が示される。アジア通貨危機による混乱が一応の収束を迎え, 次第に過去の問題となりつつあるなかで, 今後のあるべき金融システムの姿について, 腰を据えた考察が求められていると考えたからだ。

ところで, 本書の副題において, 『「強固な」金融システム』と, 「」つきで形容したのは, 何をもって金融システムが強固であるかという点については, 論者によりニュアンスにばらつきがあるからである。一方の極には, 効率的で無駄のない金融システムが「強固」であるとする見方があり, もう一方の極には, 金融危機などを起こしにくい安定性の高い金融システムが「強固」であるとの見方がある。

もちろん, 効率性も安定性もいずれも重要な属性であり, 片方だけしか考慮しない極端な見方をする者は希であるが, どちらにより重点をおいて考察

するかという違いは、論者によりさまざまなバリエーションが存在する。本書では、こうした重点のおき方に関しては、論者ごとの多様性を認めて、あえて限定しなかった。

また、本書では、経済発展にともなう政策の重点変化、マクロ経済からの分析、企業金融論などミクロ的な視点、金融危機発生後の危機管理政策など、多様な切り口からアジア諸国の金融改革を論じることができた。こうした切り口の違いに対応して、本書では序論である第1章以外の各論文を四つのパートに分類して配置した。

最初のパート1は「政策枠組みの変化」を取り扱った飯島・池尾論文と渡辺論文である。これは、本書のなかでも最も大きな視野からの考察である。パート2はマクロ経済学的な観点からの分析を行っている小田論文（経済成長）と高阪論文（金融政策）を収録した。パート3ではミクロ経済学的な観点からの分析として企業金融論のテーマである企業の資本構成や企業統治の問題を扱った渡辺論文および永野論文を収録した。パート4では、金融危機の事後処理をテーマとした国宗論文を収録した。

最後に、本書をまとめるにあたりご協力を頂いたすべての方々に感謝の意を表したい。特に、レフリーの方たちからは、多くの有益かつ詳細なコメントを頂き、本書の完成度を高めるうえでたいへんに参考になった。しかし、本書の間違いや未熟な点はすべて編者の責任に帰すものである。

2001年11月

編 者